
冷やし中華始めません

ランデブー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冷やし中華始めません

【ZPDF】

Z0113C

【作者名】

ランティブー

【あらすじ】

冷やし中華を始める以前の喫茶店のビードモーイ出来事。

蝉がミンミンと元気良く鳴いている真夏日。

太陽は調子に乗つて顔を真っ赤にして、太陽光を容赦なく僕らに当てる。熱い、熱すぎる、体の一部どころか全身がホットホットだ。こんなに熱かつたらきっと東太平洋赤道上で海水の温度が上昇するに違いない！ これが噂の口ナウジー二ヨ、じゃなくエルニー二ヨ現象か、と天氣予報を思い出す。皮膚の汗腺から水分が出る。

四月から新入社員となつたこのイカにもモテそうな顔をしている僕は、年上の姉様達から逃げている最中だつたりする。実は僕、入社初日から年上の姉様達に狙われているのだ。可愛いわねとか、弟にしたい、とか言ってくる。なので仕事に集中できない。このままで何の為に会社に来てるのかわからなくなつてしまつ。この事を上司に話したら、

「我輩もお姉様に可愛がられた時が遙か昔あつたな。うん、アレは良い思い出だ。年老いた今じゃ誰も構ってくれないから君が非常に羨ましいよ」

と言つた後突然泣きだしたので、僕はスミマセンスミマセンと何度も謝辞を述べた。僕も数十年後こうなるのかと勉強になつた。

お昼休みぐらいいはゆつくりしたいと思い、誰も知らないであろう六場のお店を探し路地裏に入った。

少し歩くと広い空間に出て、そこには寂れた喫茶店が幾つもあったが、営業中なのか準備中なのか閉店中なのかワカラナイので入りづらい。しかし【冷し中華始めました】という定番のフレーズが書かれた看板だけはしつかりとあつた。どの店も同じ事を書いているので正直目障り、何故そんなに冷し中華を始めたいんだ？

もうこの辺に六場はないな、と呟き諦めて社内食堂で昼食をとろうと思ったその時、洋館の外装である喫茶店、

『ウスイケドナニカモンクデモアルノカ?』

を見付けた。何だよこの店名は、と思いつと氣になつたので本日のオススメと書かれた黒板を見る。そこには、思わず見入つてしまつ文章が書かれていた

【冷し中華始めません】

始めるよ! とツッコミたくなるが、この短編のタイトルがそれだからあまり驚かない。ていうか冷し中華始めてない喫茶店、初めて見たぞ。この店超気になる、お昼はここにしよう。

色々気になりながらドアノブを引いて店内へ入つた。ああ冷房は涼しい

メイド喫茶みたいにお帰りなさいませ』主人様、という萌える言葉はなくて淋しいけどこれが普通か。萌えなくても、いらっしゃいませって言われるのが普通か。でもツンデレ喫茶も良いな執事喫茶はいらぬ一けど。暑さで頭がおかしくなってきたな……。

店内を見回すも、他にお客は誰一人おらずおまけに店員もいないから溜息はあ。お腹はグウと鳴る。

「何だよこのサービスが悪すぎる喫茶店は!」

棒読みに叫んでみたが反応ナッシング。こんなんだから密がいいのか、フツと鼻で笑つて馬鹿にし回れ右をして外に出ちゃおうと思つた瞬間、肩をつんづんされた。

振り向くとそこにいやがつたのは、頭髪が温水さんより薄い中年の女性。

「やあ。貴方はどう見てもお密様よね? 二口づと笑つていらつしやしませ~」

「二口づと笑えずいらっしゃいました~」

僕とこのおばさんしか登場人物がいないのだけは嫌だ。そんなん嫌だから美少女出てこいと強く願う、女神に願う。何だか虚しくて涙が出てきたからハンカチーフで拭おう。

「あらまあ、貴方泣いてるのね？」
写メ撮るから微動だにしないで

「ちよつ、待てよ！」

「あらあら。泣き顔可愛い、もつと泣かなさい」

変な声で叫んでしまつた原因は、このおばさんが検挙率NO.1を誇つた敏腕刑事でもなければ特Aランクのスーパーハケンでもないからだ。どう見てもこんなのアンフェアだよ！

「それにもしても、こんな辺鄙な所によく来れたわね。貴方は肝つ玉のすわった人なのかしら、イヒヒヒ」

し

「ふーん。貴方も犯罪者予備軍なのね」

一 溫水さんも予備軍?」

「うん。私なんて下着のCMをDVDで録画してるから」

何で頷くんだよ。本人に失礼だろうが！

「」
フリーハウスの事

۱۷۸

「何でもご注文しても宜しいんですね？」

勿論の論文、イヒヒ「ア

「じやあ冷し中華で

サアアア、締め切つて いる店内に風が吹き込む。何だよこの演出？

「冷し中華なんて作るのめんどくせーよ」

「えっ？」

「冷やし中華なんて作る氣にもならないんだよ」

ナルホド君、だから【冷やし中華始めません】って書いてたのか。

「何故冷し中華始めるんですか？ 嫌でも教えて下さい」

外から「ロロロロ」という雷っぽい音が聞こえた。横目で外を伺つた
が、相変わらず晴れている。

「嫌だけど教える。それが貴方の望みなら」

中年女性は、俯きながらキッチンの方へ歩いていった。あの～話
しの途中なんですけど。

「あの小娘め、短冊切りにしてやる！」

聞かなかつた事にしよう。小娘は気になるが。

キイー。黒板を引っ搔いたような音が店内に鳴り響いた。冷し中
華を始める喫茶店に入ってきたお客様は、僕が先程女神に願つた
美少女だった。チャイナドレスを着ている美少女を、僕はニヤニヤ
しながら見つめる。

「来たわねジャスミン」

中華包丁を右手に持つた中年女性は、ジャスミンを睨んだ。僕は
早く何か食べてさつさと帰りたいんだけど、もう無理だよね。だつ
てジャスミンが、僕に銃口を向けてるし。
「ハトムギ、この坊やが三途の川に逝つても良いのなら抵抗しなさ
い。生かしてあげたいなら……わかってるわね？」

坊やつて、君より年上だと思つんだが。そんな事より「イシ」何なんだよ！ 僕には何もワカラナイよ！

「貴方は卑怯ね。さすが小娘、人質がないと私と戦えない」

「うるさい！ 私は手段を選ばない、ただそれだけ」

僕つて人質なのか？ 急展開過ぎて着いていけない。ああ、頭痛い。

「彼は一ヶ月振りのお客様なの。邪魔しないでくれるかな？」

「そんなに強きで男前。もう、玉露も番茶も貴方を裏切ったのに」

え～と。ジャスミンはしたり顔で衝撃発言……で良いのかな？

「な、なんですって！ あの一人が裏切るなんて。嘘よ、そんなの嘘よ！」

「真実なのよ。他にも、玄米茶やほうじ茶や甜茶が私の仲間になつたのよ」

「そんな……」

喫茶『ウスイケドナニカモンクデモアルノカ？』の主人は、その場に座り込んだ。声を出さずに涙を流すその姿は、まるで女房に逃げられたおっさんのようだ。見てて悲しくなる。

「……」

ジャスミンはハトムギの温水さんより薄い頭皮を見つめ、笑いを堪えながらゆっくり近付きしゃがむ。

「皆始めるの、だからハトムギも始めましょ～。恐くなんかない、貴方は一人じゃないんだから」

さつきまでとは別人のような、優しい表情と口調のチャイナドレス美少女。

「ジャスミン……」

「大丈夫。大丈夫だから」

店内に沈黙が訪れた。長い、長い　何回鳩時計から鳩が出ただろ？か。外はどうふり真つ暗になつており、今頃電車は帰宅ラッシュで混んでるんだろうなと思つた。ん？

「ああああ！……！」

叫んだ。僕の彼女が実は常にノーパンで、ノーパン同好会の会長という事実を知つた時より大きな声で。

バーン、バーン。

「つむさいわね、彼。思わず撃っちゃつたよ
「そんな事よりジャスミン。私よく考えたけど
「冷やし中華始めるの、だよね」

「冷やし中華始めません」

ジャスミンが泣きながら店を出た。テーブルの上に横たわっているのは、イカにもモテそうな顔をしている男。しかし2発の銃弾は、天井にめり込んでいた。どうやら男は気絶しているらしい……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0113c/>

冷やし中華始めません

2010年11月24日05時09分発行